

第2回総合計画審議会における審議会委員の意見概要

※この資料は、第2回仙台市総合計画審議会における各委員の意見を事務局の責任においてまとめたものです。

	発言内容
①成熟社会の到来	財政的にできないことも出てくると思うので、市民に言いにくいことも基本構想の中に表現として入れておいたほうがいい。
	人口減とか少子高齢化とか今まで経験したことがないような時代になっていくが、身近な生活の中で仙台市民として新しい時代をどう生きていったらいいのか、分かりやすい言葉で市民の意識を導いていくようなものにしていきたい。
	高齢者は能力を持った方が多く、スポーツや健康にお金をかける余裕がある方も多い。その意味で高齢化は、悪いことだけではないと考える。
	高齢化や少子化や財政面は大変かもしれないが、だからこそもしかしたら面白いことがあるかもしれないということを市民に提案していきたい。
	高齢化をポジティブに考え、高齢者の活力を引き出す、高齢化に合わせた人の活用の仕方の工夫が必要。
②安心な暮らし	多くのもの言わぬ市民が安心して子どもを育てていける環境をどうつくっていったら良いのかというのが自然と享受できるような計画にしていきたい。
	働く女性が増えている中で、女性の働き方も多様化している。子育てと仕事の両立が確保できるような環境を整えていかないとけない。そのことが、少子化のストップにも働くと思う。
	子供達の健全な発育を確保するためには、スローガンを言うことではなく、具体的に制度設計をしていくことが必要。
③持続可能な都市	市民が夢をもって生活していくための条件を考えた場合、財政面は無視できない。財政が厳しいというだけでなく、新たな税収確保の施策も長期的な視野に立って具体的に進めていく必要がある。

	発言内容
③持続可能な都市	環境との関係では仙台の持っている自然の資源を生かすことは持続可能性を高めていく上で非常に重要。これから、それを具体化して取り組んでいくことが必要。
	環境意識の高い市民が多い。この特長を最大限発揮できる計画とすべき。
	地下鉄東西線の沿線のまちづくりに際し、各駅の特徴をどのように生かしていくか検討している。このことは仙台市の街全体を考えるには大事なことなので、そのことも考慮に入れながら進めていきたい。
	コンパクトシティの推進だけでは、中心市街地と郊外住宅地・農村との対立が生まれてしまう。郊外・農村部に住むメリットを明確に提示し、意識を変えていくことも必要。
	環境問題については、最低でも100年、大きく考えれば1,000年という形で議論しなければならない。環境は私達の暮らしに関わっているが、すぐ目の前に差し迫った問題ととらえにくい点もある。20世紀中葉までの計画の中に、大きな目で見た環境というものを盛り込むべき。
	農地や山などの自然があつてこそ、仙台市が将来も健全に進展できると思う。農業生産が持続的にできる都市と農業が位置づけられると良い。
④まちづくりの主体 (市民、企業、行政の関係)	コンパクトシティを本気で考える必要がある。公共施設が大きく外に延びると、老朽化したときに維持管理にお金がかかる。都市構造ではこういうことについてきちんと考える必要あり。
	例えば、車椅子の方が街に出て行く活動が40年前から始まり、学生も参加した中で大きな成果を挙げた。そのような事も市民の一人一人にも知っていただき、更に市民の力を引き出すようにすべき。
	地域のつながりは仙台市の誇れるもの。維持し、より力が発揮できる仕組みをつくることが非常に大事。
	町内会やNPOのような中間集団を活性化していくことで実効力のあるものにできるのではないかと。学校とか町内会とかNPOとかをどう活用するのかという具体的なアイデアを少し盛り込んだほうがよい。ただし、具体的なものを盛り込むとなると、あの施策もこの施策もとなるので、どうテーマ付けて施策をあげるかというあたりを検討する必要がある。

	発言内容
④まちづくりの主体 (市民、企業、行政の関係)	町内会は力があるので、市が一緒になって取り組むというものがあると、安心な暮らしに寄与していくと思うし、仙台というまちがもっとグレードアップしていくのでは。
	これまでは、市の決めたことに協力してもらって、市民の声を市政に生かすことを「市民協働」と定義していたと思うが、これからは市民が政策づくりにいかにかかわるか、戦略的な協働がもっと求められる。また、市民活動の現場を知らない職員が多いことに危機感を抱いている。市民と一緒に汗をかき、知恵を出す風土を市役所につくることが重要。
	昔は田舎では共同作業が当たり前のように行われていた。今は、特に転入者を中心に、都市部では協力が得られないというより、無関心の方が多い。「市民の力」とあるが、実際に「力」にすることはすごく難しい。「力」になる仕組みをつくる必要がある。
	行政以外に市民と企業ということが語られているが、「市民」とは一体誰のことをいうのか鮮明にしておく必要がある。また、「企業」という場合にもその概念を鮮明にしておかないと、まちづくりのパートナーシップとか担い手といった場合に漠然とした捉え方になってしまう。
	日本は、急速な高度経済成長を経て、家庭の孤立化が進んだが、それに社会が対応できていない。そして、税と社会福祉による是正の結果、子供をかかえる世帯から高齢者世帯にお金流れ、格差が拡大するという、先進国では特殊な形になっている。その結果、孤立した、児童虐待やDV問題などを抱える家庭が増えている。孤立し、ストレスのかかった親の虐待はエスカレートするので、経済的支援だけでなく、孤立しているところに具体的な援助の手を入れる必要がある。行政で行うのに財源が確保できないのであれば、地域コミュニティを生かして救出する設計ができないかと思う。
⑤人づくり	大学生、専門学校生など20歳前後の方が多いのは仙台の財産。学生とつながることができること自体が非常に大事。若い人も力を発揮でき、そのときのことを振り返り、いずれ仙台に戻ってくることも考えるようなまちづくりが必要。
⑥仙台の持つポテンシャルの発揮	生活の中で、仙台発祥のものや自然を含めた様々な資源を自然に知ることができ、普通に生活することで、普通に仙台を愛していくことができるようになることよい。
	仙台がもつ優れた自然環境も特筆すべきこと。これを守ってきた市民の力・行政の力を評価することは重要。

	発言内容
⑥仙台の持つポテンシャルの発揮	<p>仙台は転勤族が多いので、地域を学ぶことができなかった人がいる。自然に知る機会がなかったという点は自分だけではなく周りの人も感じている。</p>
	<p>仙台が持つ資源や課題などを小さなときから知ることができれば、もっと、こうしようとか、こういうことができるのではないかなとか、意識が芽生えるのではないかな。</p>
	<p>前回の基本計画でできていないことも多く、そのほとんどが経済。おそらくマーケットとどう向き合うかは自治体だけではできないことだからではないか。自治体だけではできないこととどう総合計画がリンクすべきなのか。どんなに意見をまとめても解決できないことだと思うので、検討が必要。</p>
	<p>都市間競争ではなく、これからは都市間共生をどう図って生きていくか。都市同士でプラスもマイナスも分け合っていないと。</p>
	<p>地場産業のイノベーション、地場産業と周辺産業のコラボレーションが非常に重要。一方では、地域課題解決型のビジネスを考え方として取り入れ、多様な産業主体が地域の経済を支えていくという流れとすべき。</p>
	<p>将来、子供達が仙台は暮らしやすいという思いを持つには、働く場や、スポーツ・文化等の魅力が必要。そのためにも子供たちが仙台の歴史や文化や自然や風土などを知ることが必要。</p>
	<p>大学と起業との連携を強くする施策と大卒者が東京に流出していくのを食い止める施策とを、軌を一にして行う取組ができると良い。</p>
	<p>これからの国際化は、仙台に外国人や企業が来たり、仙台に住んでいた人が海外に移ったりするなど、人の動きが活発となる。経済的に活力を取り込む施策を考えていくと良い。</p>

	発言内容
⑦東北との関係	<p>仙台のこれから先は、東北がおかれている状況が変わっていく中で、仙台はどのように動いていくのかという、恐らく今までよりは非常に際立った変化が出てくると思っている。おかれた状況は大変シビアで、仙台が行わなければならないことは、余り選択の余地がなく、どんどん押しつけられていく可能性がある。そういう問題をどう解くかと考えるときに、戦略的というよりも、総合的に見て、そこをどうハンドリングするかという視点が、欠かせなくなる局面がいっぱい出てくると思う。</p>
	<p>東北との関係について、仙台がやってやっているという意識を捨て、一緒にやるということ。他の都市はできないけれども仙台はやれるのでやりますからそれを使ってくださいという視点での取組が必要。</p>
その他	<p>物語のある計画にしたほうがよい。どんな仙台市民を求めるのかとか、どんな仙台市になるからこういう人達と一緒に暮らそうねとか、そういうストーリーが出てくるとよいのではないか。</p>
	<p>東北大学の留学生の人と交通計画のあり方について話をしていたが、バスを使いたいけれども使えるバス路線がない、三条町から東北大までなら自転車のほうが早いという意見が出た。現状とニーズが違うのでそういうものも吸い上げて改善できるようなシステムができるといいと思う。</p>
	<p>分科会を設置し様々な分野の意見を言い合い、そこからみんなの意見を作り出すことができれば良いと思う。</p>
	<p>戦略性はすごく大事なことだと思うが、それをどのように、計画を立て、実行のところまで移していくのか、きちんと首尾一貫したものをやっていかないといけない。単に掛け声だけで終わってしまう危険性がある。</p>
	<p>基本構想レベルでは全体のバランスを見るということが大切で、基本計画の中ではその中でどういう手を打っていくかという、少し戦略的側面というのを意識してかかるといった扱いが良いのでは。</p>
	<p>（議論の中に）国がやるべきことと市の施策が混在している。国が制度を変えないとできないこともかなり含まれている。その中で市がどこまでできるかという議論があると思う。</p>

	発言内容
その他	競争社会からの脱却は生活者としてはそう思うが、大学人としては向き合わないといけない状況。清華大学などがものすごい設備投資を行っており、今日本の大学は優位だが5～10年経つと状況が変わる。すると世界を飛び回っている富が仙台という都市を素通りするという状態が考えられる。大学人としてはそれとどう立ち向かっていくかという戦略を持たざるを得ない。市もその運営ということを考えると何らかの戦略が必要。
	いくらここで議論しても市民の支援を受けなければ何の意味もない。戦略性をもつ、選抜するというのは、市民の支援を受けにくい危険性もある。それをどう市民に還していくか事務局に真剣に考えてほしい。
	現実には厳しいとしても、先に向かったの構想なので、市民に分かりやすく明るい希望がもてるものを記載していくべき。
	市民の意見はどう吸い上げるのかというシステムは、パブリックコメントとかシンポジウムとか幾つか出ているが、もう少し強い仕組みをつくっておかないと納得していただいたかどうかを確認できない。